



相撲協会の国際条項規定は

憲法・労基法・人種差別撤廃条約に違反

山下 力・なら人権情報センター副理事長

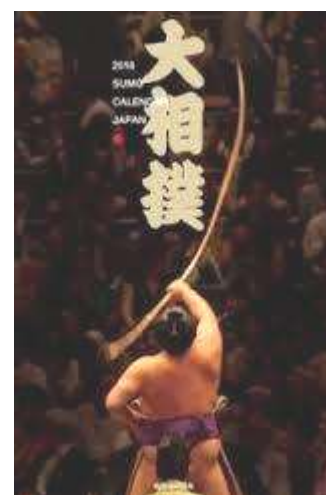
“白鵬がまたダメ押し”

大相撲夏場所は横綱白鵬が37度目の優勝を果たして幕を閉じた。場所前、「力士会」が開かれた。日本相撲協会はこの力士会に二所ノ関審判部長・藤島副部长・友綱副部长を6年ぶりに派遣した。友綱副部长は「初日前の土俵祭りで清められた土俵は神聖な場所で、やっていいことと悪いことがある」と前置きし、白鵬が春場所で審判部の井筒親方に大ケガを負わせた“だめ押し”をはじめ、立ち合いでの不十分な“手つき”、駆け引きのような“待った”や“まげつかみ”などの具体例をあげるとともに、琴勇輝が立ち合い前に発する「ホウ！」の叫び声に対しても「おかしい」と指摘。土俵上での所作、立ち合いの乱れを正すよう強く求めた。さらに、「これでもまだやるならば、力士にあるまじき行為」とし、「その内容が悪質であった場合、次は一場所出場停止もありうる」と言い切ったという。



相撲好きな小生などは最近、垣間見られる白鵬と相撲協会との間の張り詰めた関係が気になって仕方がない。そんな折も折、5月12日付の朝日新聞スポーツ欄に載った“白鵬がまただめ押し”という小見出しが目に飛び込んだ。5月場所の4日目、新進気鋭の正代との初顔合わせの土俵のことだ。白鵬は右手の張り手で正代の体勢を崩すと、左のど輪で一気に押し出した。最後の一押しがなかったとしても白鵬の勝ちは明らかだったので、“だめ押し”と注文が付いたとして不思議ではなかった。

しかし、これは大相撲の観戦でよく目にしてきた景色である。つまり、横綱や大関などが初顔合わせする新進気鋭の若い力士に手厳しく対応して“出直してきなさいよ”と、角界で言うところの「かわいがり」という激励のしぐさだと小生は思う。先の紙面では、白鵬の「いきすぎず、緩すぎず、ちょうどよかった」という談話と、「場所前に注意している。だめ押しはいけない」との二所ノ関審判部長の談話が併記されていた。まさに、一触即発の危機ではないか、と気の弱い小生は心配する。



横綱らしい品格や所作とは

そもそも小生には、公益財団法人日本相撲協会の存在がよく分からない。その定款第3条(目的)には、こう述べている。「太古より五穀豊穰を祈り執り行われた神事(祭事)を起源とし、我が国固有の国技である相撲道の伝統と秩序を維持し継承発展させるために……」とある。われわれがテレビで観ている相撲は、日本相撲

協会が主催する相撲興行の主要場面であって、相撲興行は五穀豊穡の祈りの一つとしてあった訳ではない。確かに、本場所の前に土俵開きがある。行司が祭主を務め、神式の形式を模して祝詞をあげ、興行の無事と力士の息災を祈っての行事である。

相撲が日本の「国技」と言われるようになったのは明治42年(1909年)からである。日本固有の格闘技ではない。古代の世界各地で相撲の形態に似たスポーツが盛んに行われていたことは、考古学の発掘品、遺品や壁画などで明らかになっている。

相撲協会がなぜ、公益財団法人であるのか。また、NHKだけが毎場所、大相撲のテレビ中継を最後まで流しているのか、ということなどは知らなくてもよい。ただ、小生のような相撲好きが、「横綱らしい品格や所作とは？」と聞いたときに、相撲協会は「神事」とか、「国技」とか、「日本固有の文化」などの言葉で煙にまかないで説得力のある解説をしてもらいたいものだと切に思う。



全力のぶつかり合いの相撲を観たいが、“猫だまし”という奇手も理解したい

今年の春場所千秋楽でのことだ。白鵬は立ち上がった瞬間、右手の平を日馬富士の目の前にかざすや、素早く身体を左にかわしたところ、日馬富士はそのまま土俵の外へ飛び出してしまう、あっけなく勝負がついた。白鵬は“猫だまし”という奇手を使って36回目の優勝を手中に収めたのである。“猫だまし”は今年初場所9日目に対栃煌山戦でもくり出した技だ。真っ向勝負の力相撲を期待していたファンのブーイングは鳴り止まず、座布団が乱れ飛んだ。さすがの白鵬も優勝インタビューの中で、涙ながらに「すみません」と謝罪した。

NHKで相撲解説していた元横綱の北の富士さんは「変化はやめてほしい。昔はこんなことはなかったと思う」と語っていた。けれども、「昔にもあった情景」と小生には映った。力士が立ち合いで突進するスピードはオリンピック100m競争のファイナルに残る選手の一歩目の速さに匹敵するという報道が、最近、あったと記憶している。立った瞬間、「遅れ」を自覚し、身をかかわすこともあるとみるのが自然ではないか。また、作戦として考えた奇策であったとしても小生は認めたい。でなければ、身体がもたないし、長続きしないのでは、と考えるためである。小生も横綱同士の全力のぶつかり合いの相撲を観たい。それは観客側の視点であって、常にそうなる訳でないことも理解しようよ。

“だめ押し”ぎみの行為で審判部の親方がケガをしたという。気の毒なことではあるが、観客でなくて幸いだったという対応のないことが不思議だ。直径4.55mの狭い円形の土俵で、平均身長180cm、体重150kg弱の力士がスピード感いっぱいぶつかり合う格闘がファンを引きつけるのだ。協会は観客のケガを防止する観点でサジキの安全に知恵を出すべきではないか。親方がケガしたとの大騒ぎは見苦しいし、力士を萎縮させて得するものはないと思う。



相撲協会の権威主義が真実を明らかにする作業を曖昧なままにしてきた

白鵬の所作できっちり反省しなければならないと思うことがある。2015年初場所に34回という優勝回数で新記録を打ちたた翌日の記者会見で述べた言動を小生は認めない。「1つ疑惑の相撲があるんです」と切り出し、13日目の対稀勢の里戦の取り直しになった一番をとりあげ、「あれは勝っている相撲。帰ってビデオを観たけれど、子どもがみても分かるような相撲。なぜ取り直しにしたのか。本当に悲しい思いがしたよ。もう少

し、緊張感を持ってやってもらいたいね」と批判。さらに「土俵に上がってマゲを結ってれば日本の魂。みんな同じ人間です」とまで言ったという。

この言動には厳しい対処をしなければならない問題である。審判部は名誉にかけて、白鵬を呼び出し、ビデオを再生しながら白黒をしっかりとつけるべきであるのに毅然とした処置を怠った。勝負規定第6条に「足の裏以外の身体の一部が早く砂についた者は負けとする」との条項に照らして、「取り直し」と判断したのであれば、信念を持って当事者の白鵬に説明すべき事態ではないのか。協会の変な権威主義が真実を明らかにするという作業を曖昧なままに過ごしてきた。そのことは責められねばならないと思う。

とりわけ、大相撲の組織は、力士と年寄および行司がどこかの部屋に所属しているという矛盾を抱える。この矛盾を克服するため、相撲協会は行司の軍配に審判から「異議」が告げられて協議する際にビデオ判定も取り入れてきた。その上での「取り直し」という判断は、相撲部屋を基盤として自主運営を続けてきた相撲協会の一つの知恵の到達点として評価したい。人は間違いを犯すもの。間違いを正すに憚ることなかれ。大相撲の“もう一丁”(「取り直し」)ほど理に適い、万人を納得させる具体策は他にない。



横綱・朝青龍との対戦に勝利し、4場所連続13勝2敗の成績を残すも横綱昇進は見送りに

2006年の7月場所は関が原だった白鵬の初の「綱とり」場所であった。千秋楽を迎えて12勝2敗の白鵬は、14勝0敗で前日に優勝が決定していた横綱・朝青龍との対戦に勝利。4場所連続の13勝2敗の成績を残した。誰もが「白鵬の横綱昇進」を確信していた。しかし、場所直後、白鵬を横綱に昇進させるや否やの諮問を横綱審議会に諮るための理事会は招集されなかった。報道関係の記者に囲まれて相撲協会の放駒審判部長は「朝青龍の独走を許したから」と語っていた。答えにならない答えとはこういうものだ。

落胆した白鵬はモンゴルの温泉で疲れをとるためということで帰国した。翌9月場所初日に稀勢の里戦で敗れ、その際、負傷したこともあって、その場所は8勝7敗に終わり、横綱への挑戦は白紙に戻った。相撲協会への不信の芽ばえであったと思う。

また、白鵬は優勝した際、表彰式でのインタビューの場を利用して、相撲協会が用意していたスケジュールになかったことを観衆に提案し、実行した。いずれも協会へのある種の抗議と小生は受け取っている。

その一つは、2010年の7月場所である。例の賭博問題でテレビ・ラジオの生放送と、天皇杯などの表彰が自粛されたことは記憶に新しい。その際、天皇から優勝力士へねぎらいの書簡が届けられるという異例のハプニングがあった。感激した白鵬は観客に起立を求め、「天皇陛下、バンザイ」「モンゴル、バンザイ」と叫んで、観客も唱和したのだ。

その二つは、2013年の3月場所、千秋楽のことである。15戦全勝優勝のインタビューを受けていた白鵬が最後に、「初場所中に亡くなられた大鵬さんにこの優勝を捧げたいと思います。大阪のみなさん。黙祷をどうぞよろしくお願いいたします」と発言。観客も揃って立ち上がり、「1分間の黙祷」を行った。その直後、白鵬はタオルで涙を拭っていた。



日本相撲協会理事長の八角親方(元横綱北勝海)

白鳳と相撲協会との緊張関係の最大要因は何なのか

白鵬と日本相撲協会との間に生じているギスギスした緊張関係の最大の要因は何なのか。ここに焦点を当

てて論考をすすめたい。相撲協会も白鵬自身も肝心なところを明らかにしていないので、言及しない、できないでは済まされない大きな問題を抱えていることを小生は心配している。

白鵬は間違いなく相撲が好きである。引退し、親方となって弟子を養成したいと準備をしている。すでに3人の内弟子がいる。今年1月31日には「第6回白鵬杯」を主催した。日本・モンゴル・アメリカ・中国・韓国などから多くの子どもらが参加している。長男、眞羽人(まはと)君も参加し、白鵬は父として喜んでた。

白鵬は現役のしこ名のまま親方になれる角界で最大の榮譽である「一代年寄」になれば良い。協会に著しい貢献のあった横綱に贈呈され、過去には大鵬・北の湖・千代の富士(辞退)・貴乃花がその榮譽を受けている。幕内優勝数37回をはじめ、記録という記録はすべて塗り替えてきた。双葉山関の69連勝だけが未だ届いていないだけである。

立ちはだかる国籍条項規定「年寄名跡の襲名は、日本国籍を有する者に限ることとする」

何らわだかまりなく実現しそうに見える親方白鵬の実現には、唯一の厳しい壁として国籍問題が立ちはだかっている。公益法人日本相撲協会寄付行為施行細則第48条(年寄名跡の襲名継承)3項「年寄名跡の襲名は、日本国籍を有する者に限ることとする」がそれである。2015年の11月場所中に亡くなった北の湖理事長は「いまの規定で公益財団法人の資格を得たわけですから、この規定を変えるわけにはいきません」と繰り返し述べてきた。

白鵬は自らの国籍を変える気配すら示していない。父が5年連続6度の優勝を果たしたモンゴル相撲の象徴的な元チャンピオンであり、また、メキシコオリンピックではレスリングで銀メダルに輝いたモンゴル初のオリンピックメダリストであること。母は元外科医で、チンギス・ハーンの血脈を誇る名門出身であり、両親共々に白鵬の国籍移籍に反対しているという。



小生の心配は、事がこじれると国際問題に発展しかねない問題だからである。国連は差別と人権に極めて敏感であることを忘れてはならない。50年も前に国連で採択されているのに放置してきたわが国も、遅ればせながら1995年に世界で146番目に加盟した「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約」が効力を持つてから20年が経過している。相撲協会の寄付行為施行細則第48条3項「年寄名跡の襲名は、日本国籍を有する者に限ることとする」は、日本国憲法第14条(法の下での平等)や労働基準法第3条に違反すると同時に、「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約」に抵触する由々しき問題なのだ。

白鵬を「第2の力道山」にしてはならない

北の湖前理事長が繰り返し「年寄の資格は日本国籍を有する者。日本の伝統文化である以上、規定を変えることはありません」と断言していた。30数年前、ハワイから高見山らの「黒船来襲」があるまで国籍条項はなかったのではないのか。相撲界が外国人に乗っ取られるのでは、と心配して、当時の春日野親方(元横綱栃錦)がこっそりと書き換え、「国籍条項」を差し込んだというのではないか。何が伝統文化か。2011年春場所を中止に追い込んだ「大相撲八百長問題」を、お得意の“伝統文化”で解説して欲しいものだ。この破廉恥な事件で相撲協会の誰が責任をとったのか。

小生は白鵬を「第二の力道山」にしてはならないと思っている。白鵬が相撲界に貢献してきた多大な功績に照応する唯一の方法は「帰化せず親方」という実にささやかでさわやかな望みを実現することである。協会は理事会で白鵬に「一代年寄」の名誉を贈呈することを決めるだけでよいのだ。